

ここからだからだの 健康タイム

対談編

ゲスト 中島岳志さん（前編）

2005年に「中村屋のボース」（白水社）で大佛次郎論壇賞を受賞以来、「ヒンドゥー・ナショナリズム」「保守問答」「インドの時代」など多数の作品を著している政治学者・歴史学者の中島岳志先生。

深い歴史洞察に基づいた中島先生の「人間観」から、心と身体の健康につながるヒントを伺いました。



今回は前編として、中島先生のこれまでの歩みや、研究者としての道を選んだきっかけなどを紹介します。

鳴海周平（以下 鳴海）

中島先生とは、同じラジオ局でレギュラー番組を持たせていただいていますが、政治から歴史、経済、国際情勢など、本当に幅広い情報に精通していらっしゃるので、いつも驚きながら楽しめてもらっています。

今日もお伺いしたいテーマはいろいろあるのですが、先ずは、おそらく神童と呼ばれていたであろう幼少期の頃から教えていただけますか？

中島岳志先生（以下 中島）

（笑）落ち着きがなくて、しょうもない子供だったかもしれません。勉強が嫌

いで、小学校の成績はビリから数えた方が早いくらいでした。まさか学者になるなんて、誰も思っていなかつたんじやないでどうか（笑）。

鳴海 それは意外でしたが、急に親近感が湧いてきました（笑）。

中島 ただ、偏った子で歴史だけは大好きでした。これはたぶん、僕が小学校2年生の時に両親が連れて行ってくれた静岡県の登呂遺跡の影響ではないかと思います。

弥生時代の農耕集落が遺されている登呂遺跡には、当時の人々の住居や高床倉庫などが再現されていて、どれも面白いものばかりでした。中でも「火起こし機」の模擬体験は強烈なインパクトでしたね。それで、親に泣いてお願いし

たんです。「火起こし機買つて!!」って。きっと自分の心にも着火してしまったんだと思います(笑)。

鳴海 「火起こし機」で駄々をこねる子供は、なかなかいませんね(笑)。でも、さすがに売つていないです。

中島 レプリカを買つてくれました(笑)。それで何年も飽きずに遊んでいましたね。今にして思えば、古来の人間

の精神みたいなものに関心があつたんだと思うんです。何千人も昔に原始的な生活をしていた人たちは、火が起きた瞬間いつたどんな感覺だったんだろう? そういった古代の人たちの精神と通い合つてみたかったんですね。きっとこの時の体験が、歴史を好きになつたきっかけだと思います。

歴史少年、大阪中の史跡を自転車で探索

中島

僕が小学校4年生の時に、お札

がそれまでの聖徳太子から福沢諭吉に変わりました。それで「1万円になつた福沢諭吉ってどんな人なんだろう?」と思って図書館で調べてみたら「中津藩の蔵屋敷で生まれた」と書いてある。大阪梅田近辺にある我が家からそんなに遠くない場所だったので、さつそく自転車で行つてみました。

そうしたら、当たり前のことですが「福沢諭吉生誕の地」と書いてあるわけ



です。「自分で調べて、そこに行つたら、そのものがちゃんとある」っていうことが面白くて、それから歴史を調べては大阪中の史跡を自転車で訪ね歩きました。先ほどの火起こし機のように、もうこの世にはいない人たちの観念に想いを巡らせることが楽しかつたんです。

鳴海 先生の歴史学者としての幅広い視点は、そうした体験が原点だつたんですね。

中島 ラジオ番組でお話を伺う度に感じていたリアルな歴史観と、奥行きの深さの理由がよくわかりました。

それにしても、3時間番組という長い放送時間を感じさせない先生の話題

の豊富さには、いつも感心させられます。

中島

いろいろなことが複雑に関係しています」と答えている中で、「一人のお婆さん」の反応だけが違つていて。

「何をお探しですか?」という同じ質問に対し、ひと言「位牌だ」と答えただですね。それも「何でそんな当たり前のことを訊いてくるんだ?」という

表情で。

この時、僕は地震で体験した「物理的な揺れ」以上の「精神的な揺れ」を感じたんです。

両親とも戦後生まれで団塊の世代、ずっと核家族の我が家には仏壇がありませんでしたから、よけいにこのお婆さんの言動がショッキングだったのかもしれません。

まるで僕の中の空洞部分と出会つてしまつたような感覚でした。

「信仰」と「愛国」という2つの原点

中島

その1ヶ月くらい後、僕は神戸に行つてみました。震災前は公園だったと思われるような場所で座つていたら、隅の方で凧揚げをしている一人のお爺さんがいるんです。上手に揚げようとしているわけでもなく、ただ空をじっと見つめて凧を揚げているんですが、かなりの時間が経つてもずっとそのままの姿勢で揚げ続けていたので気になつて話しかけてみました。

ようやく規制が解除されはしたものの、焼け野原のようになつてしまつた震災現場で必死に探し物をしている人たちに、リポーターがインタビューをし



「解決の糸口が見つからない空虚感」のように思っています。

中島 「宗教・信仰」と「ナショナリズム・愛国」という2つのワカラナイものに、僕たちはいつたいこの先どうやって向き合っていけばいいんだろう?

そんな疑問を持ちながら、いろいろな本を読んでいる時に出会ったのがボースという人物でした。

中村屋のボースとの出会い

中島 ボースは20世紀前半に日本にやつてきたインド人で、1910年代のインドを代表する独立運動の指導者でもあった人です。

鳴海 余談ですが、クリームパンを考案したのが新宿中村屋さんだったんですね。あんパンとジャムパンは銀座の木村屋さんが考案したことは知っていますが、クリームパンだけはずつとわから

パンやお菓子の老舗でしたから、ボースはここでも大きな功績を遺していま

鳴海 先生の最初の著作「中村屋のボース」の主人公ですね。

中島 はい、新宿中村屋に婿養子として入り、日本にインドカリーを伝えたインド人です。今は「インドカリー」のイメージが強い中村屋ですが、もともとはパンやお菓子の老舗でしたから、ボースはここでも大きな功績を遺していま

なかつたんです(笑)。「中村屋のボース」を拝読して長年の疑問がスッキリしました(笑)。

中島 ありがとうございます。思わずところでお役に立てたようで嬉しいです(笑)。

僕の20代は、まさにこの本を書くためにつたと言つてもいいくらい、ボースの軌跡を辿つて世界中を歩き回りました。

インドでは、彼の育った場所や通っていた学校、活動していたおおよその場所も訪れましたし、パンコクやクアラルンプール、シンガポールにも行つてみました。原宿にあつた家から新宿中村屋までの通勤ルートも繰り返し歩きました。こうしたところは小学生の時からまったく変わつていませんが(笑)、彼が見た風景を少しでも追体験することで、何かが見えてくる気がします。

ボースはインドの独立を獲得するため、身に危険を感じながらも、武力革命に必要な武器と資金を調達するべく海外へ逃亡しました。日本軍とうまく手を結びながら道を開こうとして、結局は挫折してしまったわけですが、当時の僕と同い年で、こうした激動の時代の真っ只中にいた彼の苦悩や葛藤の足跡を辿ることは、現代世界をどう捉えて、これからどう行動すればよいのか?という自分自身への問いかけそのものでもあつたんです。

次回の後編では、インドやガンディーについてお話を伺いながら、仏教的な考え方方に学ぶ「心身の健康のヒント」を探つていきます。どうぞお楽しみに!!

中島 岳志 プロフィール

1975年大阪生まれ。

大阪外国语大学でヒンディー語を専攻。京都大学大学院博士課程修了。

京都大学人文科学研究所研修員、ハーバード大学南アジア研究所客員研究員を経て、現在、北海道大学公共政策大学院准教授。

鳴海 先生が「中村屋のボース」を執筆したのは29歳の時で、ボースが来日したのと同い年!ここにも、とても深いご縁を感じますね。

中島 来日した29歳の頃、彼は既に壮絶な人生の渦中にありました。インドがまだイギリスの植民地だった時代に過激な独立運動指導者だった彼の首には、イギリス側から多額の懸賞金がかけられていたんです。